



Title	ワークショップへの感想文② 当事者の夢想に引きずられない歴史分析を
Author(s)	小竹, 由剛
Citation	臨床哲学ニュースレター. 2022, 4, p. 118-118
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/86368
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

特集3 「〈応用〉することの倫理——緊縛シンポ、ブルーフィルム、ジェンダー」

ワークショップへの感想文②
当事者の夢想に引きずられない歴史分析を

小竹 由剛

「緊縛シンポ」の提起した問題は、哲学・倫理学・歴史学など多岐の分野に複雑に関わりますが、私はいずれも専門外ですので、歴史問題に絞ってコメントさせていただきます。

本シンポが図らずも「緊縛の起源に関する俗説に不用意に権威づけをした」との批判がアカデミアから提出されています。まったくその通りだと思います。海外では緊縛の捕縛術起源説唱道者と否定論者のバトルのようなものが続いているが、本シンポが朝日新聞の英語版で紹介されたこと、YouTube 動画が拡散されることによって、捕縛術起源説唱道者達に、強力な援護射撃を与えたことになります。これでよいのでしょうか？

現代緊縛の起源が「捕縛術」にあるとする「緊縛の捕縛術起源説」は、少しまじめに調査しますと、ありそうにない仮説であることが分かります。おそらく、かなり真剣に調べてみても、ひっくり返らないのではないかと考えています。もちろん、多くの緊縛師と呼ばれる人達は、ほぼ例外なく捕縛術に興味をもち、そして影響を受けています。「現代緊縛は捕縛術に影響を受けています」は正しい言説ですが、「現代緊縛は捕縛術に起源をもつ」とは同義ではありません。一連の議論のやりとりの中で出てくる、Master K の書籍にも、強い影響を受けているとは書いているものの、起源とまでは主張されていません。

実は（あたり前のことですが）「当事者」の中で緊縛の歴史にこだわっている人はごく一部です。ほとんどすべての「当事者」は歴史にはある程度の興味はあっても、その正確さにはこだわっていません。さらには、「緊縛の捕縛術起源説」は、内外問わずほとんどすべての「当事者」にとって、とても収まりのよい説となります。なにせ、伝統と格式のある文化的な担い手のような妄想の世界に入れますし、1980年代にピークを迎えたわが国のSMエロ文化との差異化もできます。特に欧米では緊縛とポルノ文化との峻別が不可欠です（日本のようにエロに寛容な社会ではありません）。そういう状況で「緊縛の捕縛術起源説」はとてもありがたい仮説であることは容易に想像できます。ですが、アカデミアの方は、当事者の夢想や願望に引きずられてはいけません。「ガチ」で研究されていらっしゃることですので、謝罪で終わらせずなく、議論を戦わせながら、深く緊縛の歴史を継続研究されるのがそちらの業界の責務かと思います。その結論がどこにたどり着くかは別にして、きちんとした報告（英語）で緊縛シンポの区切りをつけることを切望します。

（こたけ・ゆうごう）